KAN 環

野遊
2017
第 26 号

千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2017 年 4 月

野遊（のあそび）

あかねさす　紫野行き　標野（しめの）行き
野守（のもり）は見ずや　君が袖振る

額田王（ぬかたのおおきみ）

紫の　にほへる妹（いも）を　憎くあらば
人妻（ひとづま）ゆえに　我恋（あれこ）ひめやも

大海人皇子（おおあまのみこ）

日差しが高まり始めた早春、上田市塩田地区ではため池の土手焼きが行われる。４００年の歴史を持つという春の風物詩だ。火が放たれると枯草がバリバリと燃え上がり、白煙が池一面を覆う。瞬く間に焼き尽くされると、焼け焦げた堤が現れる。ため池の維持管理のため、稲作作業が始まる前の年中行事である。焼却後、ため池に祀（まつ）られた水神様へ「作業の安全、五穀豊穣」の祈願神事を行う。間もなく芽吹きの季節を迎える。

表紙写真・文　矢幡正夫

contents

4　フロンティア躍働 ---------- 伊藤文子
「まちなかキャンパスうえだ」コーディネーター
吉澤茉帆さん

8　観点 ---------- 岡田基幸
～明るく大胆な未来予測から考える地域づくり②～

9　信濃を旅した文人たち ---------- 海野　郁
早熟の天才児　村山槐多

14　上田情報ライブラリーでは今・・・ ---------- 望月聡子
インターネット社会の「安全」「安心」を考える
～ネットリテラシー講座～

16　ぶらり散策 ---------- 吉池みどり
妙見寺の鳴龍

18　寄稿 ---------- 山口　登
自然を友に信州の日々を楽しむ
（三）木曽谷７０キロメートル、ウメの開花前線を追う

26　あとがき

フロンティア躍働

「まちなかキャンパスうえだ」
コーディネーター

吉澤茉帆さん

「地域の中で働く」を考える

「ただ仕事をこなすだけでなく、地域に溶け込んだ働き方。仕事でつまずいても地域で支え合える、そんな環境はどうしたらできるだろうか」。上田市在住の吉澤茉帆さん（32歳）は大学卒業以来模索している。職場は変わっても、いつもこのテーマとともにある。

決して軽くないテーマだが、本人はいたって明るい。ショートカットが似合うスポーツマンタイプだ。くりっとした瞳から快活な性格がうかがえる。一年ほど前に失業したときも、「無職になっちゃった、あはは」と気にしなかった。今は、その明るさを生かして、半年前にオープンした「まちなかキャンパスうえだ」でコーディネーターとして働く。

吉澤さんは松本市出身。広島大学大学院を卒業後、広島と山口で特別支援学級とインターンシップの仕事に関わる。多くの経験を積んだのち、3年前に故郷に戻る。10年ぶりの信州で、温泉を楽しみながら「働き方」を考えている。

2月初旬、海野町にあるキャンパスを訪ねた。内部は、入り口近くに10人ほどが読書や自習ができるワーキングスペース、奥に学校の教室ほどのイベントスペースがある。いずれもオープンな雰囲気で、wifi、プロジェクターの設備もある。

Q　はじめに、この「まちなかキャンパスうえだ」について説明していただけますか。

A　上田市の学園都市づくりの一環で、市内４大学が共同で運営し、地域と大学の連携を目指す施設です。このキャンパスはその窓口で活動の場ともなっています。

Q　具体的にはどのような活動をされていますか。

A　学生や市民の方々に足を運んでもらうため、市民向けの講座やイベントを開催しています。これまでに行った講座は、「信州の蚕糸業とシルクロード」「国際協力キャリア入門」「地域づくり人材育成」など地域に関係した内容が多いです。専門的な「メカトロニクスとは」というのもありますが、気軽に参加できるコンサートなども開いています。

Q　随分多彩ですね。誰でも参加できるのですか。

A　はい、できます。イベントや講座は予約が必要なものもありますが、ワーキングスペースはどなたでも気軽に使っていただけます。

Q　とても便利ですね。ロケーションもいいので利用者が多いと思いますが、どのような方が来られますか。

A　学生さんやまちづくりに興味のある方などが来られます。様々な話題を持って来られますので大変勉強になります。いろいろなジャンルのお話が聞けるのは楽しいですね。

Q　聞き上手でいらっしゃるんですね。オープンして半年ですが、やりがいを感じること、反対に苦労されるのはどのようなことですか。

A　やりがいを感じるのは、例えば大学生と商店街や市民の方との地域活性化のための企画を進める際に、双方の橋渡し役ができたときです。遠慮や立場の違いから言い出せなかったことを聞き取り、提案という形で学生がまとめたものをテーブルの上に乗せられたときは、コミュケーションのお手伝いができたかなと嬉しくなります。

反対に苦労というか難しいのは、企画したイベントが学生や市民の方々のニーズに合っていたのかどうかわかりにくいことです。これは長い目で見るしかないのかもしれませんので、関係者と話し合いながらいろいろ試してみたいと思っています。それと、意外と大変なのが人集め。講座やイベントに参加者

が数人ということがあり、担当の先生に申し訳なく思うこともあります。

Q　決められた仕事だけをやるのと違い、多面的な能力が必要なんでしょうね。
次にお伺いしたいのは、「地域に溶け込んだ働き方」にこだわるようになったきっかけは何ですか。

A　自閉症をもつ子どもたちが通う特別支援学級で働いていたときのことです。彼らは中学校や特別支援学校の高等部を卒業すると、ほとんどが作業所などに入所します。能力も性格もさまざまなのに、もっといろいろな選択肢があってもいいんじゃないかと強く思いました。例えば地域の豆腐屋さんや本屋さんなどの小売店に就職する、農業に携わるなど。作業以外の仕事にどうして就けないのか、どうしたら就けるのか知りたいと思うようになりました。

Q　適材適所な職業を、というお気持ちがインターンシップのお仕事につながったのでしょうか。

A　そうですね。どんな職場で何の仕事をするかは非常に重要だと思います。生活面だけでなく精神面にも大きく影響すると思います。学生の声も企業の声も聞けば聞くほど、お互いが満足できるマッチングは稀ですね。自分のこれからについてもなかなか決められないでいます（笑）。

Q　自分に適していてかつ満足できる職業、誰もが悩むことですね。このキャンパスにおいて、これからどんなことをしていきたいですか。

A　企画力を高めたいですね。雑談をしながらニーズをすくい取りテーマをはっきりさせ、形にする。それが地域に役立ち、関わる人たちに喜んでもらえたら最高です。

読書や自習ができるワーキングスペース

Q　長年抱えていらっしゃるテーマ「地域の中で働く」についてお聞かせいただけますか。

A　答えは簡単には見つかりそうもありませんが、まず地域について知ることが大切かなと思います。そのために、いろいろな方々とコミュニケーションを重ねていきたいと思っています。

Q　最後にこれからの抱負をお聞かせください。

A　いまのコーディネーターの仕事も好きですが、仕事の中でもっと自分自身を発揮できるようになりたいと思っています。自分がやっていることの意味や価値を伝えられたり、より具体的に活かせるようになりたいですね。

インタビューに対して、腕を組み首を傾げながら、「うーん、そうですねぇ」慎重に言葉を選びながら答える。にこやかな表情の中に誠実さが漂う。そんな姿勢がキャンパスの魅力になっているのだろう。訪問者が絶えない。

人の話を聴くのが好きという吉澤さんの見聞は広がるばかりだが、「何となくいて便利な人」を卒業して、「頼りたいと思ってもらえるような専門性を高めたい」と言う。具体的にはまだ決まってないそうだが、吉澤さんの将来に大きなエールを送りたい。

平成29年2月9日訪問
伊藤文子

おもしろWeb

信州の文化財検索

公益財団法人　八十二文化財団

http://www.82bunka.or.jp/index.php

長野県内の文化財の情報を毎年更改して公開。
地図から、分野から、文化財体系図から、市町村から
探すことができます。身近な文化財を探してみましょう。

観点

～明るく大胆な未来予測から考える地域づくり②～

前回は、地方での暮らしの在り方が見つめ直されていくことを述べた。地方に住む魅力は、自然の中で課題発見・解決の力をつけられるということのほかにもう1つある。それは、地方には生活の安心・安全があるという思いが広まっていることだ。どういうことかというと、人口が密集しているが故に起こる、テロや犯罪への警戒心であったり、巨大災害が起きたときのインフラ面の脆弱性であったりを動物的な本能で回避しようと動いているように感じるのだ。地方で危機がないわけではないが、都会で何かあったら危ない、地方にいよう、とする帰巣本能に似た何かが働いているのではないかと思う。

ここでまず取り組むべきテーマとして挙がるのが、住環境の整備や住居の確保だ。地方では空き物件の増加が大きな問題となってきている。この空き家を利用して、若者向けのリノベーションを推進するのだ。一生あくせく働かなければいけないほどの住宅ローンを抱えなくても、性能の良い住まいが手に入れば、新たなお金の使い方ができてくる。定住までいかずに、デュアルライフを提案しても良い。町や村へ人の流れを呼び込むことが、さらに発展的な未来を呼び込むだろう。様々な地域で取り組みを進めているコンパクトコミュニティ、コンパクトシティ構想も一手だ。駅前に図書館やスーパーなどを集約させ、バスなどの物流を充実させる。

仕事の在り方もコンパクトに、在宅でできるものは家を拠点に活動するのも一考だ。そうなれば住みやすさは格段にアップする。子育て環境だってコンパクトな方が動きやすい。楽に動けるようになれば、女性の社会参加も促せるはずだ。千葉県流山市が良き手本だ。これが、2つ目の明るく大胆な未来予測「10年後、地方には若者が残り、人が集まるようになる」ということになる。

地域に住む人が増え、働ける若者も増えるということは、受け皿となる地域産業も明るく大胆な未来予測に基づいて発展していくのだ。次号では、その具体的な方策について述べたいと思う。

一般財団法人 浅間リサーチエクステンションセンター
(AREC)　センター長・専務理事
信州大学 繊維学部 特任教授 (工学博士)　岡田基幸

信濃を旅した文人たち

早熟の天才児
村山槐多（むらやまかいた）

神よ
いましばらく私を生かしておいて下さい
私は一日の生の爲めに
女に生涯ふれるなと言はれれば
その言葉にもしたがひませう
生きて居ると云ふその事だけでも
いかなるクレオパトラにもまさります
生きて居れば空が見られ木がみられ
画が描ける
あすもあの写生をつづけられる。

槐多忌の冒頭、信濃デッサン館館主・窪島誠一郎さんが一篇の詩を朗読する。村山槐多が、死の前年に詠った『いのり』という詩の一節だ。槐多は大正8年2月20日、結核性肺炎のため22歳と5ヶ月の生涯を閉じた。

信濃デッサン館は、槐多を始めとする夭折画家たちの美術館だ。1979年、信州上田に開館。槐多忌はその翌年から始まった。始めはごく少人数だったというが、今では全国からたくさんの人が集い、今年で38回目を迎えた。

当日午後、近くの公民館で特別ゲストを迎えて対談などが行われ、陽が傾いた頃、デッサン館へと場を移す。館内には祭壇が設けられ、前山寺住職の読経が流れる中を焼香。2月末、命日近くの日曜日に行われるため、例年、雪が降ったり厳しい寒さだったりするが、参列者はその程度のことはものともしない。三々五々焚火を囲み、豚汁や甘酒、お酒などをいただく。ゲストの方も加わって、親しくお話しできるのも魅力だ。

槐多は信州の人間ではないが、縁あって何度か上田を訪

槐多忌冒頭　挨拶する窪島館主

れている。意外と知られていないが、実は上田ゆかりの画家山本鼎とはいとこ同士なのだ。14歳年長の鼎は、槐多の才能にいち早く気づき、中学生の彼に油絵具一式を与えて絵の道へ進むよう勧めた。

その後、渡仏した鼎に、槐多はデッサン、水彩画、版画、ポスターなどを頻繁に送っている。鼎は、「将来、自分などは到底かないそうもない画家になるにちがいない」と考え、画家になることに強く反対していた槐多の父谷助に説得の手紙を送る。槐多には、上京して画家小杉未醒を訪ねるようにと書いた。鼎は、留学仲間だった未醒に、「彼の少年は悍馬だ。君ならば或は御せるかもしれない」と、頼んでいた。

洋画家の野見山暁治さんと併せて
170歳の対談

17歳の夏休み、槐多は、小県郡大屋（現上田市大屋）で医院を開いていた鼎の父山本一郎宅を訪れる。

翌年、5月から6月にかけて再訪。そこから上京し、未醒邸内の離れに住みつく。10月には、第1回二科展に《庭園の少女》などを出品、早くも注目を集めた。その後も日本美術院賞を受賞するなど、次々と優れた作品を創出していく。同時に、デカダンな生活の始まりでもあった。

再び上田を訪れたのは、19歳の3月から4月、そして10月。それぞれ1ヵ月近く滞在した。太郎山、烏帽子岳に浅間山、雄大な自然に囲まれた暮らしは槐多の魂を浄化していく。

その際に著した「信州日記―制作と思考」の中から、いくつか抜粋してみよう。

序

あらゆる退化を示したる過去を振り切って自分はなつかしい信州に来た。

自分の新生は始まるのだ、過去をすっかり棄てた、自分は五十枚の木炭画を作る事を計画した。

それらに自分は自分の芸術のあらゆる光を輝やかし表わすのだ。

それらをして自分は自分の芸術の誕生たらしめる。

美麗なる自然は見よ新しく冷たい秋の空気の中に確かに実在している。

10月15日　晴

俺の物は「俺自身」の芸術だ、俺はもう迷わぬ、うんとうんと描く。

10月24日

朝上田へケントと木炭紙を買いに行く、山にすこし金粉がかかっていい景色だった。

10月27日　晴

朝べんとう持ちでうちを出て烏帽子ヶ岳へ登った。いい山だった。二時頃かえった。

10月30日

朝上田の方面を歩いた。

太郎山にかけての野は実にいい野だ、

ああ美しきかな。

槐多は、大屋橋から浅間山を仰ぎ、神川の土手から太郎山を描く。田園風景や、点在する野良人を描き、一郎おじさんを描いた。

槐多はまた、優れた詩を数多く遺した。そのひとつ、『宮殿指示』の中に有名な一節がある。

走る走る走る
黄金の小僧ただ一人
入日の中を走る、走る走る
ぴかぴかとくらくらと
入日の中へとぶ様に走る走る
走れ小僧
金の小僧
走る走る走る
走れ金の小僧。

黄金の小僧は槐多自身に違いない。ひたむきさに満ちている。

ところが、深酒や奇行を繰り返すなど、東京での生活は再び荒んでしまう。

突然喀血したのは21歳の春だった。結核性肺炎と告げられる。それでも描きたいと、冒頭に掲げた『いのり』の詩を詠んだ。

祈りが届くことはなかった。翌年2月、流行性感冒にかかり発熱。

18日夜半、発作的にみぞれまじりの激しい雨の中を飛び出してしまう。その晩から危篤に陥り、20日未明に亡くなる。

鼎や未醒、画家仲間たちが駆けつけ、石井鶴三がデスマスクを採った。信濃デッサン館に掲げられているブロンズは少年そのもの、安らかに微笑んでみえる。

死の翌年、千枚余りの遺稿をまとめた『槐多の歌へる』が出版された。芥川龍之介や室生犀星など、そうそうたる作家、詩人たちが推賞。有島武郎は「凡てを焼尽してもなほ悔ひないまでに、自己を延ばし延ばした槐多氏の如きは、わが芸術界に於て稀有なことだといへると思ふ」と評した。有島が買い取った槐多の《カンナと少女》の代金で、雑司ヶ谷の墓地に「槐多墓」と刻まれた墓石が置かれた。

高村光太郎は、詩『村山槐多』の中で「火だるま槐多」と詠い、その早すぎる死を悼んだ。槐多は、光太郎の工房をしばしば訪れていたという。

いつでも一ぱい汗をかいてゐる肉塊槐多。
五臓六腑に脳細胞を偏在させた槐多。
強くて悲しい火だるま槐多。
自然と人間の饒多の中で野たれ死にした若者槐多よ、槐多よ。

槐多作品は各地の美術館にもあるが、信濃デッサン館は41点を所蔵、最大のコレクションとされる。

若き日、古本屋で偶然手にした『槐多画集』。衝撃を受けた窪島さんは、その後、コレクションを続けていた。ある時、大屋に槐多の絵が残されていると聞き、初めて上田を訪れる。案内してくれたのが、山本鼎や林倭衛などの評論を書いていた小崎軍司さんだった。その折、小崎さんに案内された塩田の地。

信濃デッサン館（上田市東前山）

「この地に槐多の絵が並ぶ美術館をつくりたい。ここで槐多と暮らすことができたら」と、信濃デッサン館が誕生した。

入口付近に展示された《尿する

赤々と燃え上がる焔

僧》は圧巻だ。槐多が好んだガランス（朱色）が、まさしくマグマのような光を放つ。裸婦像も実に力強い。そして、信州風景の数々。《子守の少年》は、現在の東御市和の田園風景が描かれていて郷愁を誘われる。

中学生の槐多は、美少年にあこがれていた。槐多にとってのプリンス、稲生少年の横顔を描いた《稲生像》、彼宛の恋文も展示されている。

没後１００年が経とうとしているが、槐多は今なお新鮮で衝撃的だ。

槐多忌の焚火は赤々と燃え上がり、「火だるま槐多」を愛する人々の宴は続く。

海野　郁

＊　槐多の父谷助は、一時、森鷗外の弟潤三郎の家庭教師をしていた。母たまは、姉のたけと共に鷗外宅に女中として奉公。谷助とたまが結婚、槐多が生まれる。名付け親は鷗外だったと伝えられている。また、伯父山本一郎も、鷗外の父静男の書生をしていてたけと結婚、鼎が生まれた。

参考文献
『槐多の歌へる　村山槐多詩文集』講談社
『長野県文学全集　第９巻　日記編〈Ⅰ〉』郷土出版社
『わが愛する夭折画家たち』窪島誠一郎著　講談社
『鼎と槐多』窪島誠一郎著　信濃毎日新聞社
『鼎、槐多への旅』文　窪島誠一郎、写真　矢幡正夫　信濃毎日新聞社
『生誕１００年　村山槐多展』図録　福島・三重県立美術館
『村山槐多』草野心平著　日動出版
『高村光太郎詩集』草野心平編　角川文庫

槐多が愛した信州の山々

上田情報ライブラリーでは今・・・
「インターネット社会の「安全」「安心」を考える」

～ネットリテラシー講座～

近年、スマートフォンの急速な普及により、どこにいてもインターネットが利用でき、様々な情報が手に入るようになりました。スマートフォン（以降スマホ）は、通話やメールなどの通信機能のほか、地図やカメラ、動画の録画や再生、ゲームなどパソコンと同じような様々な機能を使うことができます。またその分リスクも伴い、インターネットを悪用した犯罪に、子どもたちが巻き込まれるケースが後を絶たず、問題となっています。

こうしたネットトラブルから子どもたちを守ろうと、2月17日(金)ネットリテラシー講座が開催され、会場には親子連れやネット環境に関心を寄せる人たちが集まりました。

これは、上田ケーブルビジョンが創立45周年記念事業として、昨年の7月から全5回にわたり、『インターネット社会の「安全」「安心」を考える』と題してネットリテラシー講座を企画し開催してきたものです。講師は、一般社団法人セーフティーネット総合研究所の南澤信之さん。政府、中央省庁、地方公共団体等で公的委員を複数歴任、現在、長野県警察サイバー犯罪対策アドバイザーや地方公共団体等のコーディネーターを務めている方です。

5回目最終日は「子どもにスマホを買い与える前に親子の約束事を決めよう」と、上田情報ライブラリーのセミナールームで開催。南澤さんの1時間半におよぶ話は、身振り手振りをまじえて大変説得力がありました。

県内の最近の事案では、動画サイトやゲーム内での「課金」で子ど

もがゲームに夢中になり、父親のクレジットカードに約30万円の請求がきてしまった事例や、自分の意図しないところで個人情報が流出し、知らない人から写真や迷惑なメッセージが送られてくるようになった事例などを紹介。子どもは使えるところまで使うので子どもに渡す携帯端末には必ずパスワードで「機能制限」をかけたり、保護者が何をするべきか知る必要があるとのこと。また、ＳＮＳ（Web上で人と人のつながりを促進・支援するネットサービスのこと）を利用することにより、自分は非公開に設定していても、公開している友達とつながっていれば無意味であること、そして架空請求被害では、1円でも払ってしまったら終わり！　完全に無視することが大切であると話されました。

最後の質問コーナーでは、40代の男性より高校を卒業する息子にアプリを入れて欲しいとねだられるのだが、危険かどうか判断つきかねると問われ、連絡先や位置情報、画像ファイルなどがONに変わるものはダウンロードを控えてほしいとのことでした。

主催したＵＣＶ上田ケーブルビジョン　技術部の田辺洋一さんたちも、ネットトラブルによる未成年者の自殺などに胸を痛めており、子どもたちのために今できることはないかと企画したのだそうです。これからインターネットはますます普及、活用されていくでしょう。私たち個人個人が意識を高め、トラブルに巻き込まれないために対策や知識を深めていくことが必要だと感じました。

平成29年２月取材　望月聡子

田んぼの畔や水路の土手の陽だまりに、早春の象徴、愛らしい土筆（つくし）の集団が顔を見せる。生命力の強い雑草が周辺を覆い尽くす中、土筆はもまれながらスギナへと成長する。
小川での魚とり、山羊の餌とりなど、ワンパク時代が懐かしくよみがえってくる。

写真・文　矢幡正夫

ぶらり散策

鳴龍

妙見寺の鳴龍

鳴龍山密厳院妙見寺は文治年間（1185 ～ 1189 年）に開山された。当時の領主岳石三平胤盛が日頃から信仰していた大日如来と妙見尊を安置するために創建した。現在の本堂は宝暦年間（1751 ～ 1764 年）に 15 世弘算により改築された。その際、狩野派の秀山信尹（しゅうざんのぶただ）により上下龍 2 頭が描かれ、10 畳分の大きさがある大天井に組み込まれた。その龍頭の下で手を打つと天井裏に共鳴して「シサシシーン」と見事に反響する。頭の真下で手を打つときと、ちょっと外れたときとでは、反響音が違う。広いお堂なので、季節にかかわらず足元はひんやりする。

「日本四方鳴龍」によると、東は日光山、西は京都相国寺（しょうこくじ）、北は青森龍泉寺（焼失）そして南が信濃の妙見寺だと言われている。

妙見寺鳴龍は平成元年（1989 年）に上田市指定有形文化財に指定されている。境内正面にある「妙見寺の掌善掌悪の碑」は宝暦 7 年(1757)に建立されたものである。向かって右側の碑には「掌・善」、左側の碑には「掌・悪」と刻まれている。この碑は平成 6 年（1994）上田市指定文化財に指定されている。

（注）山門は三間一戸、切妻、桟瓦葺、外壁は真壁作り、白漆喰仕上げ、腰壁は海鼠壁、高欄付き。中部、四十九薬師霊場第5番札所（札所本尊：なで薬師・ボケ薬師）
宗派：真言宗、本尊：大日如来
長野県上田市下武石６５４－11

天井絵 (孝行の手かがみ)

花桃の里

妙見寺からしばらく行くと余里（より）の「花桃の里」がある。素朴な案内板に誘われていくと、田んぼの畦に沿って小川が流れ平行して濃淡桃色の景色がどこまでも続く。それは山側の民家の庭や空き地にも咲き、全村桃色に染めている。

ほのかにふふめる花々は心の琴線に触れ、花日和の散策は爽快だ。

４月末から５月初旬、山里の春の風景である。

平成 29 年３月５日訪問

吉池みどり

寄稿

自然を友に信州の日々を楽しむ

山口　登

（三）木曽谷七〇キロメートル、ウメの開花前線を追う

「白梅（南木曽町）」　撮影：原　和明（2012.4.17）

木曽では、ウメの花は観賞用であると同時に、梅漬けの実の収穫が目的となっている。

はじめに

連載三回目。今回は木曽山林高校へ二度目の勤務をしたときの話です。昭和五二年（一九七七）四月に赴任して、まず木曽の自然を観察し楽しむ市民レベルの会を作りたいと考え、一年かけて関係者に根回しをして、翌五三年の春に「木曽の自然を愛する会」を立ち上げました。

毎月一回、自然観察会を開いて野鳥観察、植物観察、昆虫採集、季節ごとの星座を見る会等を行いました。星座を見る会は木曽西高校の天文斑との共同開催でした。会員は小学生と高齢者が主力で、そこに中年がチラホラ加わるという構成でした。野鳥・昆虫・樹木・星座等は会員の中に指導者クラスの人がいましたが、時には木曽谷の植物に詳しい奥原弘人先生（松本市）や、地質を研究されている島田安太郎先生に講師をお願いしました。また、年に一～二回機関誌『みやま』の発行をするなど、忙しい日々を送りました。私は会の事務局長という役割でした。

生物季節の観察を計画

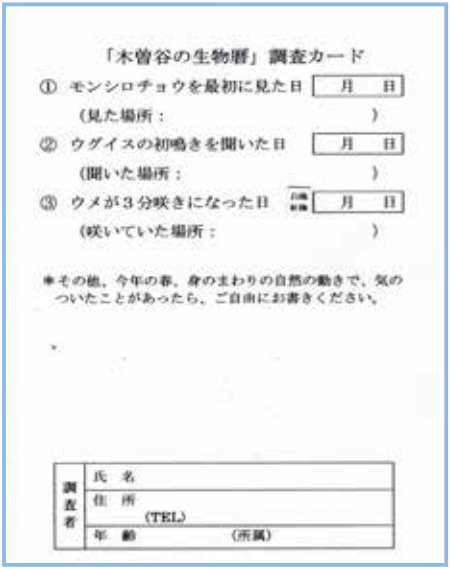
ここではその会の活動の中から、昭和五八年（一九八三）に会の設立五周年記念事業として取り組んだ「木曽谷の生物暦調査」のことを紹介しようと思います。

まず、「生物季節」という言葉ですが、ご存知でしょうか。気象台や測候所では所員やその地域の生物に詳しい人に委嘱して、生物季節の観測を行っています。全国で一律に観測する「規定種目」というのがありますが、それはウメ・ツバキ・タンポポ・サクラ等の開花、イチョウやカエデの紅葉、ヒバリ・ウグイス・ツバメ等の鳥、トノサマガエル・ホタル・アブラゼミ等の動物（昆虫）の初見あるいは初鳴きなど、植物一二種・動物一一種が指定されています。

会ではこの生物季節の観測を、一地点ではなくて南北に七〇キロメートルという長大な木曽谷の各地で観測して、季節の進行を明らかにしようという壮大なプロジェクトを企画して、「木曽谷の生物暦調査」と名づけました。会員だけではなく、広く住民の方々に呼びかけて行うことにしたのです。

第一図はその調査カードです。調査種目はウメ・ウグイス・モンシロチョウの三種に絞りました。これを会員には二枚配布して、一枚は自分で調査し、もう一枚は協力者を探して調査をやってもらうことにし、そのほか郡内のすべての小中高校・営林署・町村役場に協力のお願いの文書を添えて各八枚送りました。送付した調査カードの枚数は約六〇〇枚になりました。

調査カードを返送してくださった方は全部で一三五名、枚数は一四一枚でした。一人で六カ所の調査をしてくれた方がいました（毎



「木曽谷の生物暦」調査カード

① モンシロチョウを最初に見た日　月　日
（見た場所：　）

② ウグイスの初鳴きを聞いた日　月　日
（聞いた場所：　）

③ ウメが3分咲きになった日　月　日
（咲いていた場所：　）

＊その他、今年の春、身のまわりの自然の動きで、気のついたことがあったら、ご自由にお書きください。

調査者
氏名
住所
（TEL）
年齢　（所属）

第１図　生物季節の調査カード
（現物はハガキ大）

日、中津川から木曽福島まで車で通勤している方でした）。

返送されてきたカードの内訳は小学生から三一枚、営林署の職員の方が二一枚と多数を占めました。小学校では担任の先生が授業で取り上げて生徒に指導してくださったところが何校もありました。

モンシロチョウは失敗？

さて、調査結果ですが、モンシロチョウは選定ミスでした。モンシロチョウの食草はハクサイや菜の花などの栽培植物が主なのですが、木曽谷の山間地ではそれらの栽培が少ないので、モンシロチョウの絶対数が少なく、観察できなかった方が大勢出てしまいました。

ここでは一番一般的でデータ数が多かったハクバイ（白梅）の開花を中心に調査結果を紹介します。ウグイスの初鳴きについてはウメの開花と関連づけてお話しします。

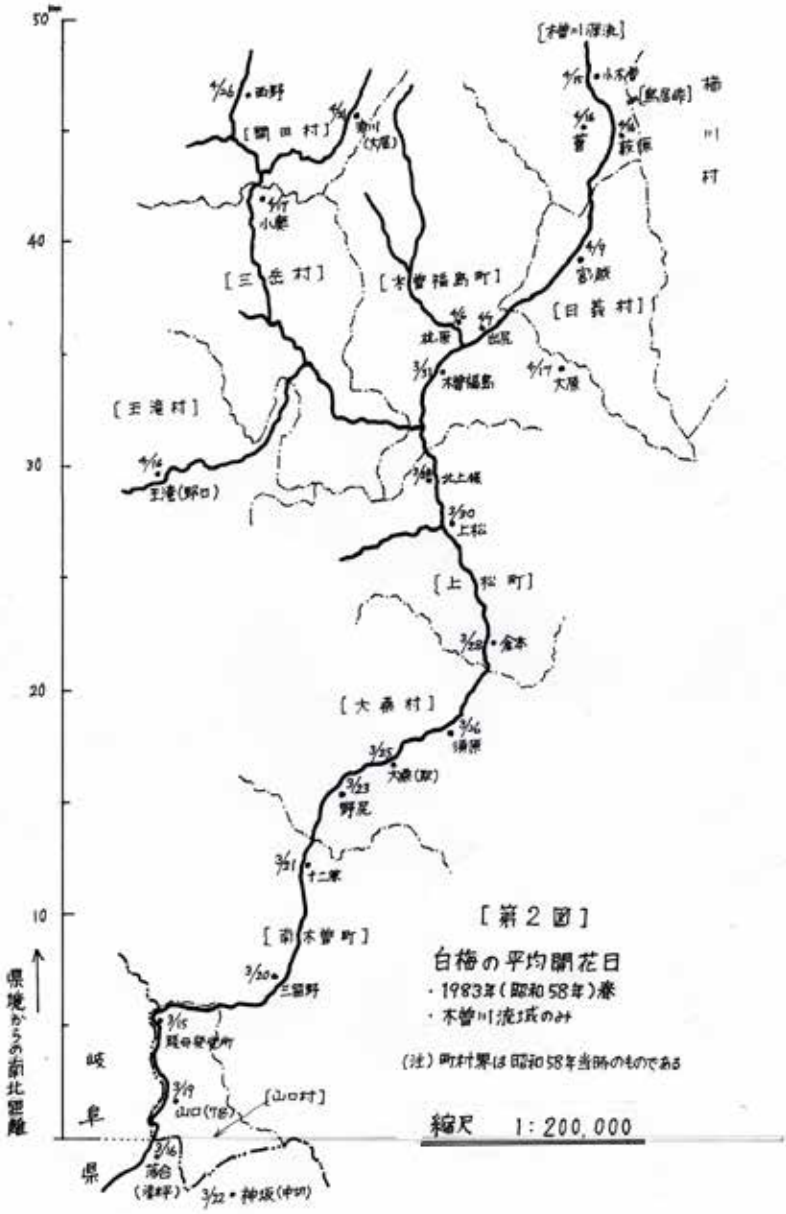
なお、この調査を行った昭和五八年には木曽の町村は平成の合併をする前でしたから、その当時の町村名で表示しています。また、木曽谷は木曽川流域と奈良井川流域の二つの谷が合わさって成り立っていますが、ここでは木曽川流域に絞ってお話しします。その点をご承知ください。

ウメの開花前線は見事に成立

ウメの開花は、その地点の積算温度*が一定の量に達したときと言われていますが、その積算温度は基本的には緯度と標高の二つの要素に支配されます。木曽川の場合は南の入口中津川市落合から北へ行くにつれて緯度は高くなり、同時に標高も高くなりますから、南から北へ開花前線は上がっていくことになります。木曽谷北部の奈良井川の場合は南に向かって標高が上がっていって権兵衛峠に達し、緯度は逆に北に向かって高くなりますから、二つの要素が打ち消し合うことになります。しかし標高の方が大きく影響します。今回、奈良井川水系の方は図示するのを省略しましたが、上流の権兵衛峠に向かって開花前線は北上していくことがはっきりとわかりました。

第二図を見てください。県境の中津川市落合で三月一六日に開花した白梅は、日々北へ進んで四二日後の四月二六日に開田村（現・木曽町開田高原）西野で最終を迎えました。

細かく見ると、落合から六キロ北の「賤母発電所」の方が一番早く一五日に開花しています。これ


[第2図]
白梅の平均開花日
・1983年(昭和58年)度
・木曽川流域のみ
(注) 町村界は昭和58年当時のものである
縮尺 1:200,000
[木曽川源流]
[関田村]
[三岳村]
[木曽福島町]
[日義村]
[王滝村]
[上松町]
[大桑村]
[南木曽町]
[山口村]
岐阜県
県境からの南北距離
50km
40
30
20
10
4/6 西野
4/4 [関田村]
4/17 小嶽
3/31 木曽福島
4/17 大原
4/4 王滝(野口)
3/30 上松
3/22 倉本
3/16 須原
3/25 大桑(原)
3/23 野尾
3/21 十二兼
3/20 三留野
3/15 妻籠
3/19 山口(田)
3/16 落合
3/22 神坂(中切)

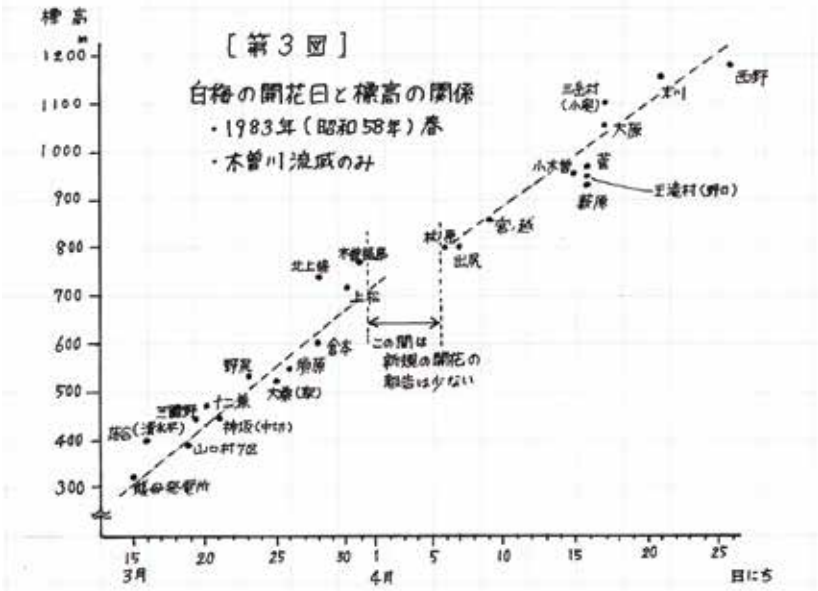
第2図

は賤母発電所の地点が木曽川の川岸の標高三二〇メートルなのに対して、落合の観察地点である清水平集落は木曽川から六〇〇メートル離れた河岸段丘上の標高四〇〇メートルのところにあり、標高が影響して開花日が逆転したということです。

さらにこの図の北の端を見ると、木祖村の薮原や小木曽と左手（西側）の開田村西野や末川が、ほぼ横一線（緯度が同じ）に並んでいるのに、開田村の方が五日～一〇日も開花が遅くなっていますが、これも標高の影響です。一般的に本流よりも支流の方が川の勾配が急になっていくからです。

そこで第三図に標高と開花日の関係を示してみました。ほぼ直線上に点が並んでいます。平均すると、一日につき開花地点の標高が二〇〇メートルくらい高くなっていくことになります。

この図も細かく見ると四月一日から五日までの間は地点の分布があいていますが、このときの気温のデータのグラフをチェックしたところ、ゆっくり上昇してきた日平均気温が少し足踏みしていることがわかりました。また、四月二一日から二三日までの三日間は、この時期としては低温が続いたのですが、これが開田村西野の開花が遅れた原因であろうと推測されます。



木曽谷南部ではウメの開花とウグイスの初鳴きは同時進行

さてウグイスですが、ウグイスは木曽地方では漂鳥と言って渡り鳥ではないけれど、季節によって国内で移動する鳥なのです。冬の間は愛知県とか三重県とか少し南に移動していて、春が近づくと次第に北へ上ってきて三月はじめには木曽谷に戻ってきていると思われます。調査カードの「その他」の欄に上松と木曽福島の方から二月下旬にウグイスを見たという記録がありました。

ウグイスは自分の縄張りに戻ってきても直ぐには囀りません。温度とともに光の強さに反応して鳴きはじめるのです。表をご覧ください。町村ごとでまとめてあります。この年のウグイスの初鳴きを平均ではなくて、その町村で一番早く鳴きだした日でみると、山口村の三月一三日から開田村の四月六日まで、一ヶ月たらずの間にすべてはじまっています。

「ウメにウグイス」という言葉がありますが、この年の木曽谷では、南部の山口村から中部の木曽福島あたりまでは、ちょうどウメが咲き始めた頃にウグイスも鳴きだしたとみられます。

モンシロチョウはデータにまとまりがありませんでした。ざっくり言うと木曽谷一円では四月五日から六日頃に出現のピークがあって、そのあと四月中はずっと見られたという状況でした。

ウグイスの初鳴き日

町　村	最初に聞いた日	平均初鳴き日
山　口　村	3月13日	3月23日
大　桑　村	3月13日	3月28日
上　松　町	3月27日	4月　3日
木曽福島町	3月23日	4月　5日
木　祖　村	4月　3日	4月　8日
開　田　村	4月　6日	4月10日

サクラがウメを追いかける

調査カードの「その他」の欄にサクラ（ソメイヨシノ）の開花日を書き添えてくださった方が何人もいました。

木曽のサクラの開花は四月八日に山口村を出発して、一一日三留野、一四日大桑村、一六日上松・木曽福島、二三日王滝村、二五日開田村となりました。ウメの開花前線が山口村から開田村まで四三日かけて上がっていったところを、サクラは一八日と半分以下で追っかけていって、ゴールは四月二五日とほぼ同時というのも、自然界

の不思議な一致といえるのでしょうか。

ちなみに開田村では、サクラの開花がはじまる頃、ようやくカラマツの芽吹き（開葉）が始まり、落葉広葉樹もそれに続きます。

ここからが木曽谷の春本番になるのです。

この調査は、大勢の方々の熱心な観察によって、早春のダイナミックな季節の北上を見事に再現することができました。

（注）＊積算温度…定義はいくつかありますが、一般的には一月一日から、日平均気温が植物の芽が動きだす五℃以上のものを足し算していって、例えば四〇〇℃になるとサクラが開花するというように使われます。

（撮影：矢幡正夫）

信州元気塾
http://www.shinshugenkijuku.jp/

NPO 信州元気塾は、障がい者の生きがいと生活の安定のために、パソコン解体を通したリサイクルの輪で自立を実現する事業を行っています。
資源化しリサイクルするため、そして障がい者の収入（工賃）を生み出すために皆さまから不要になったパソコンの寄付を募っています。

あとがき

小寒の一日、大宮ソニックシティで「フォレスタニューイヤーコンサートin大宮」が開かれた。「時代とともに、生まれた名歌、名曲。特に日本の風土に育まれた美しい詩と旋律は、いつも人々の思い出に寄り添い、人生の励ましや安らぎとなる。フォレスタ独自のアンサンブルで豊かな音楽世界の広がりをめざす」がグループのキャッチフレーズ。

新春のプログラム第１部は、「荒城の月」から始まった。「一月一日」「春一番」「早春賦」など、昭和時代に青春を過ごした我々にとって思い出の歌が続く。直立不動で歌う彼らのクオリティの高さ、その世界に惹き込まれていく。

第１部の最後は会場全員で「あざみの歌」を歌った。脳裏を巡ったのは、美ヶ原高原の360度の展望、菅平高原に咲く秋の草花の風景だった。

第２部は彼らの本業であるオペラ「天国と地獄」序曲から始まる。次いで男性７人、女性６人の自己紹介。ユーモアをまじえた話しぶりは温かくて好感が持てる。

その後も「まつり」「桃色吐息」「星降る街角」など、懐かしい歌の数々に思わずリズムをとり口ずさむ。最後はしみじみと「心の瞳」を聞いた。歌ったね！　聴いたね！　快い興奮は、帰りの新幹線でもやむことはなかった。

３年前にオープンした上田市のサントミューゼでも様々なコンサートが開かれる。中でもワンコインコンサートは“ワンコインマチネー上質な音楽をワンコインで楽しむ、平日の午前”とうたわれて人気だ。昼前後１時間程のコンサートで、サントミューゼの他、市内の公民館などでも開催される。

２月はクアチュールＢ（サクソフォン四重奏）が行われ、満席だった。４月24日には福川伸陽さん（N響首席奏者）のホルンコンサートが開催される。

音楽を身近に感じて、心にゆとりのある日々を送りたいと思う。

（萌）

KAN
環　千曲川地域の人と文化　　第 26 号　野遊
2017 年 4 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部
電話 /FAX　0268-25-3115　　info@zuku.jp

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　望月聡子　矢幡正夫　吉池みどり